資料　５

埼玉県における高校献血の実施状況

１　過去５年間の状況

・ 県教育委員会、血液センターの働きかけで、国公立高校における校内献血実施校は緩やかな増加傾向にある。

・ 知事と教育長からの校内献血推進の依頼を受け、校内献血の実施を計画的に学校行事に位置づけ、可能な学校の日程調整を県教育委員会、血液センターで調整をした。

		国公立高校	私立高校	計
平成 15 年度	実施校	46	32	78
	受付数	3,587	7,016	10,603
	献血数	2,850	5,510	8,360
	400ml	568	698	1,266
平成 16 年度	実施校	44	32	76
	受付数	3,583	6,947	10,530
	献血数	2,842	5,587	8,429
	400ml	683	544	1,227
平成 17 年度	実施校	45	34	79
	受付数	3,038	6,702	9,740
	献血数	2,374	5,397	7,771
	400ml	582	526	1,108
平成 18 年度	実施校	51	35	86
	受付数	4,404	5,428	9,832
	献血数	3,399	4,193	7,592
	400ml	409	730	1,139
平成 19 年度	実施校	82	35	117
	受付数	4,028	5,749	9,777
	献血数	2,938	4,286	7,224
	400ml	495	651	1,146

２　出前講座の生徒の感想等

・ 保健医療部薬務課と教育局保健体育課の連携により、「献血に関する出前講座」を実施している。
・ １９年度は、１１校（小学校５校・中学校１校・高校５校）が授業や保健委員会活動などで実施した。
・ 血液疾患についての理解が深まった。献血をする前にお話を聞いてよかった。献血するのに不安が薄らいだ。などの「よかった」という感想が大半だった。

３　指導案（例）について

全学校に通知し、ホームページに掲載（別紙）

教 保 体 第 ６ ２ 号
平成１９年４月１１日

各 県 立 高 等 学 校 長　　様

埼玉県教育委員会教育長

高校生への「献血に関する指導案（例）」について（通知）

高校生献血の推進については、平成１９年４月４日付け薬第１２号で知事と連名で依協力を依頼したところです。

また、献血の重要性の普及啓発については、平成１８年１２月定例県議会において、「献血の重要性について保健体育の時間などを通じてきちんと時間を確保して教えるべきと考えるが、本県における現状と今後の取り組みについて伺いたい」との質問に対して、「今後は、献血の意義や重要性について、生命の相互扶助やボランティア活動の観点から、保健体育や特別活動の時間などで取り上げるよう働きかけてまいりたいと存じます。」と答弁し、また平成１９年２月の予算特別委員会において「県立高校における献血の実施率は私立高校に比べて低いため、県立高校における献血の意義などに関する教育が必要と考えるが、今後の取組について伺いたい。」との質問に対して、「各高校に対し、保健体育の時間で、献血の意義や重要性についての意識を高めるため、具体的な指導のモデルを示して、積極的に取り組むように指導して参りたい。」と答弁しました。

これらのことを踏まえ、県教育委員会では、本年度、全ての県立高等学校の「保健体育科」の授業時間において「献血」に関して授業を行っていただけるよう、別添のとおり『高校生への「献血に関する指導案（例）』を作成しましたので、御活用くださるようお願いします。

担当；県立学校部保健体育課
健康教育担当　謝（しゃむら）　村
TEL ；０４８－８３０－６９６３
FAX ；０４８－８３０－４９７１
E ﾒｰﾙ；a0146278@pref.saitama.lg.jp

高校生への「献血に関する指導案（例）」

平成１９年４月

埼玉県教育委員会

保健体育科（科目保健）学習指導案

1　単元名　　現代社会と健康　（エ）様々な保健活動や対策（献血の意義や重要性）

2　本時の学習と指導

（１）ねらい

・　日本赤十字社の活動について、仲間の意見を聞いて、自分の考えをまとめたり発表したりできる。【関心・意欲・態度】

・　献血の基礎知識について、日常生活にあてはめて考えたり、資料をもとに、意義や必要性について調べたり、整理できる。【思考・判断】

・　行政や民間機関・国際機関などが行う様々な保健活動や対策について理解できる。【知識・理解】

・　献血は１６歳から実施できることを理解できる。【知識・理解】

・　献血に協力してくれる若い人が減っていることが問題であり、献血は相互扶助（ボランティア）の精神で成り立っていることを理解できる。【知識・理解】

（２）準備　教科書、資料、ワークシート

（３）展開

段　階	学　習　内　容　・　活　動	指導上の留意点○・評価規準◆	評価方法● 資料等　◇
導入 10分	1　身近な健康診断について確認する。	○　思いついたことを、自由に発表するようにさせる。	
	＜発問＞ みなさんが中学校や高校において受けてきた健康診断はどんなものがありましたか？		
	＜予想される生徒の反応＞ ・内科検診　・身体測定 ・歯科検診　・心臓検診 ・耳鼻科検診	○　学校において実施されている各検診等は学校保健活動の一部であることを理解させる。	
	2　行政による保健活動について知る。	○　学校保健活動以外の行政による保健活動にはどんなものがあるか理解させる。	◇ワークシート
	＜板書事項＞ わが国では、出生から高齢にいたるまでのライフステージやライフスタイルに対応したさまざまな保健活動がおこなわれている。 ●　母子保健活動（妊娠後～乳幼児期） ●　学校保健活動（幼稚園～高校・大学） ●　産業保健活動（労働者） ●　老人保健活動（７０歳以上） ●　地域保健活動（地域住民）		
	＜発問＞ 他に、どんな保健活動があるか知っていますか。		
	3　民間機関や国際機関の保健活動について知る。	○　これらの保健活動は行政による活動であり、その他に民間機関として日本赤十	

	・日常の生活を振り返り、気が付いたことを発表する。	字社やＮＧＯ（非政府組織）の活動が行われていることを理解させる。 ○　国際機関としてはＷＨＯ（世界保健機関）やＵＮＩＣＥＦ（国連児童基金）やＵＮＥＰ（国連環境計画）などの活動があることを知る。	
	＜板書事項＞ ●民間機関による保健活動　・日本赤十字社　・ＮＧＯ（非政府組織） ●国際機関による保健活動　・ＷＨＯ（世界保健機関）・ＵＮＩＣＥＦ（国連児童基金）　・ＵＮＥＰ（国連環境計画）		
展 開 37 分	4　日本赤十字社の活動内容について理解する。	○　自分の今までの知識をもとに、予想し、発表する。	
	＜発問＞ 日本赤十字社は、どのような活動をしているか知っていますか。		
		○　日本赤十字社の活動内容を知り、その中の血液事業の一環として献血が行われていることを理解させる。 ◆　日本赤十字社の活動について、仲間の意見を聞いて、自分の考えをまとめたり、発表しようとしている。 【関心・意欲・態度】	
	＜板書事項＞ 《日本赤十字社の活動》 ①災害救護　②医療事業　③国際活動　④看護師等養成　⑤血液事業 ⑥講習普及事業 ⑦青少年赤十字（ＪＲＣ）⑧社会福祉事業		
	5　血液事業である献血の現状と課題について学習する。 ・５～６人でのグループ学習	○　血液事業として、献血を実施していることを説明する。 ○　あらかじめ決めたグループ(男女混合)に、すばやく席を移動させる。	
	＜発問＞ 今、「献血」の一番大きな問題は何だと思いますか？		
	・ブレインストーミングで意見を出させる。 ＜予想される生徒の反応＞ ○　血液が足りない ○　汚染された血液がある ○　献血をする人が少ない ○　エイズ　○輸血	○　できるだけ多くの意見を出すよう伝える。 ○　机間指導により、意見があまりでないグループには直接アドバイスする。 ◆　献血に協力してくれる若い人が減っていることが今の大きな問題であることを知っている。　【知識・理解】	◇献血者減少のグラフ ●発表の様子
	○　教師の話を聞く。 （献血の意義について）	○　時期によっては血液が不足することがあることを知らせる。 ○　献血が少なくなっている現状を知らせる。	
	＜教師の話＞ 血液は人工的に造ることができないものであり、病気や怪我で血液を必要としている人に血液を届けるためには、献血への協力が必要です。		

	6　献血の基礎知識について学習する ・５～６人のグループ学習 ・教科書や資料をもとに次のことについて調べる。 （各グループ１項目）	○　献血についての基礎的な事柄について理解させる。 ◆　献血の基礎知識について、日常生活にあてはめて考えたり、資料をもとに、調べたり、整理している。　【思考・判断】 ○　学習が進まないグループには、資料を見るポイントを示す。	◇献血リーフレット ●ワークシートの記述
	7　学習したことをまとめ、発表する。 ＜調べる内容＞ （１）献血の種類について	○　グループの発表に、その都度教師が必要事項を付け加えながら進める。 ・　献血の種類には全血献血と成分献血があり、全血献血には 200ml 献血と 400ml 献血、成分献血には血漿成分献血と血小板成分献血がある。	
	（２）献血のできる年齢	・　献血には採血基準がある。 《採血基準》 ・200ml 献血　16 歳から 男性　体重 45kg 以上 女性　体重 40kg 以上 ・400ml 献血　18 歳から 男性女性とも体重 50kg 以上 ・成分献血　18 歳から 男性　体重 45kg 以上 女性　体重 40kg 以上 ・比重 ◇　献血は１６歳から実施できることを知っている。　【知識・理解】	●ワークシートの記述
	（３）献血に必要な時間	・　採血にかかる時間は、人によって違うが 200ml 献血、400ml　献血で 20 分程度であり成分献血は採血量に応じて 40 ～ 90 分程度である。	
	（４）献血のできる場所	・　献血のできる場所は次の場所である。 ①献血ルーム 都市部を中心に交通の便の良いところにあり、献血者がリラックスできる設備が備わっている。 ②献血バス（街頭献血） スーパーや駅前など多くの人が集まる場所で献血の呼びかけを行う。 ③その他（事業所単位） 学校や会社単位で、その学校や会社にいる人を対象に臨時の献血会場とする。 ○　本県には７箇所の献血ルームがあり、本校に最も近いのは○○駅にあることを教える。	

	（５）献血の手順 （６）献血後の注意事項 ○教師の話を聞く ・　献血をすることにより、その結果から自分の健康管理にも役立つことを知る。	・ 献血は次のような手順で行われる。 《献血の手順》 ①献血受付 ②問診票の記入 ③血液比重測定、血液型事前判定、問診および血圧測定 ④献血 ⑤休憩 ⑥献血カードの受け取り ・ 採血中や採血後はまれにめまいや皮下出血などの副作用が発生することがあるので、献血をした後は、次の注意事項を守るように理解させる 《注意事項》 ①献血当日は、激しいスポーツを避けること ②水分を十分に補給すること ③重いものを持ったり身体に力を入れすぎないようにすること。 ④針の跡をもんだり、こすったりしないこと さらに成人であれば ⑤採血直後の飲酒は避けること ⑥自動車などの運転をする時は十分な休憩をとること　など ○　教師の体験や献血後の通知等の内容を伝え、献血についての理解を深めさせる。	資料
まとめ 3分	8　健康の保持増進を図るために、日本赤十字社など民間の諸機関や国際機関などにより、様々が活動が行われていることを確認する。 《教師のまとめの話》 ・　生涯を通じて健康な生活を送れるように、ライフステージやライフスタイルに応じて、様々な保健活動が行われています。 ・　また、血液は人工的に造ることができないもので、献血を通じて、みんなが健康な生活を送れるように、時には、自分が協力を求めたり、困っている人を助けることができるのです。	○　様々な保健活動がヘルスプロモーションの考え方に基づいていることを理解させる。 ◆　様々な保健活動が自分たちの健康の保持増進を図るために行われていることを知っている。　【知識・理解】 ○　献血をとおして、助け合いの精神や命の大切さを考えさせるようにする。	◇ワークシート ●ワークシートの記述内容

ワークシート（さまざまな保健活動や対策）

１年＿＿組＿＿番＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

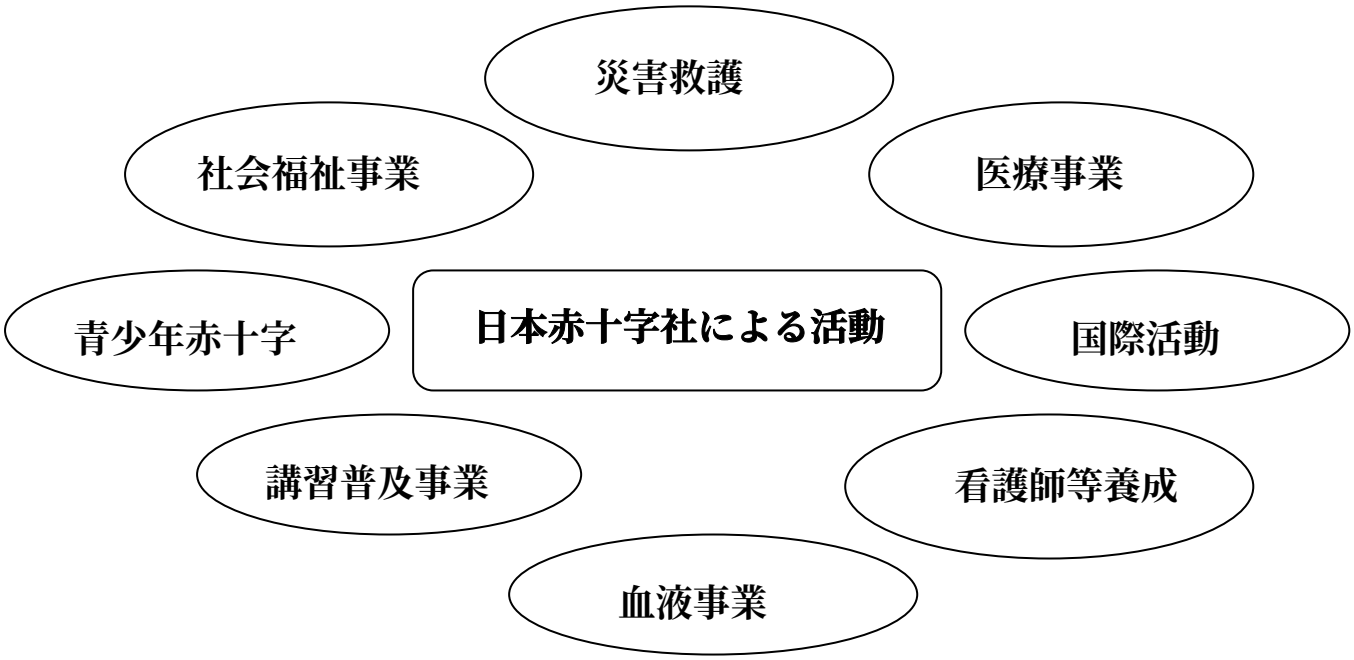
○　私たちの身近なところで様々な保健活動がおこなわれている。

１　行政による保健活動

母子保健活動	（妊娠後～乳幼児期）
学校保健活動	（幼稚園～高校・大学）
産業保健活動	（労働者）
老人保健活動	（７０歳以上）
地域保健活動	（地域住民）

２　民間機関による保健活動

（１）日本赤十字社による活動



（２）ＮＧＯ（非政府組織）による活動

人権・環境・平和などの諸問題に「非政府」「非営利」の立場で解決に取り組む民間組織

（３）国際機関による活動

（ア） **WHO（世界保健機関）**

Ｗｏｒｌｄ　Ｈｅａｌｔｈ　Ｏｒｇａｎｉｚａｔｉｏｎの略
国際連合の活動のうち、保健衛生分野を担当している。感染症や薬物乱用の対策、健康教育の推進、衛生統計の作成、医薬品の供給など広い分野にわたって活動している。

（イ） **ＵＮＩＣＥＦ（国連児童基金）**

第二次世界大戦の犠牲となった子どもの救済を目的として発足した。現在は、開発途上国の子どもの栄養改善や病気の予防のために活動している。

（ウ） **ＵＮＥＰ（国連環境計画）**

1972 年に国連人間環境会議で決定・設立された「人間環境宣言」および「行動計画を実施するための機関。地球環境問題の深刻化や活動も重要視され、オゾン層保護のウィーン条約策定をはじめ地球温暖化防止や有害廃棄物の越境移動問題でも中心的な活動をしている。

３　献血について

（１）献血者の推移について

【資料１　（年別・年齢別）献血者数の推移】

グ　ラ　フ

献血に協力してくれる若い人たちが減っていること。
近年の献血者推移を見てみると、　　歳以下の献血者が減少していることがわかる。

（２）月別献血者数の状況について

【資料２　月別献血者数の推移】

グ　ラ　フ

平成　　年　　月に血液が非常に少なくなった。
例年１２月から３月にかけて、風邪の流行などにより献血者数が減少するため、輸血用血液が不足します。

血液は人工的にはつくれない

助け合いの心

思いやりの心

命の大切さ

（３）献血の基礎知識

●献血の種類は・・・・

- **全　献　血**
  - 200ml 献血
  - 400ml 献血
- **成分献血**
  - 血漿成分献血
  - 血小板成分献血

●献血のできる年齢は・・・・

【採血基準の主なもの】

		200ml 献血	400ml 献血	成分献血
年齢		16 歳から	18 歳から	18 歳から
体重	男	45ｋｇ以上	50ｋｇ以上	45ｋｇ以上
	女	40ｋｇ以上		40ｋｇ以上

●採血にかかる時間は（人によって個人差がある）・・・・

〇200ml 献血・400ml → ２０ 分程度

〇成分献血 → ４０～９０分程度

●献血のできる場所は・・・・

献血ルーム

都市部を中心に交通の便のよいところにあり、献血者がリラックスできる設備が備わっている。本校の最寄りの献血ルーム→（　　駅　　）

献血バス

多くの人が集まる場所。（学校や会社、スーパー店頭、駅前など）

● 献血の手順は・・・・

① **献　血　受　付**

身分証明書などを提示する本人確認あり

（２度目以降は、献血カードを提示すればＯＫ）

② **問　診　票　の　記　入**

問診票の質問に正確に答える

③ **血液比重測定・血液型事前判定**
問診および血圧測定

問診内容のプライバシーは厳守される

（医師による問診）

④ **献　　血**

採血針などは一人一人新しいものが使われる

⑤ **休　　憩**

献血後は水分を取ることも忘れずに

⑥ **献血カードの受け取り**

新しい献血の記録がされ、今後の献血記録のために必要となるので大切に保管する

●献血後の注意事項

① 献血当日は激しいスポーツは避けること
② 水分を十分に補給すること
③ 重いものを持ったり、身体に力を入れすぎないようにすること
④ 針の跡をもんだり、こすったりしないこと

成人であれば・・・

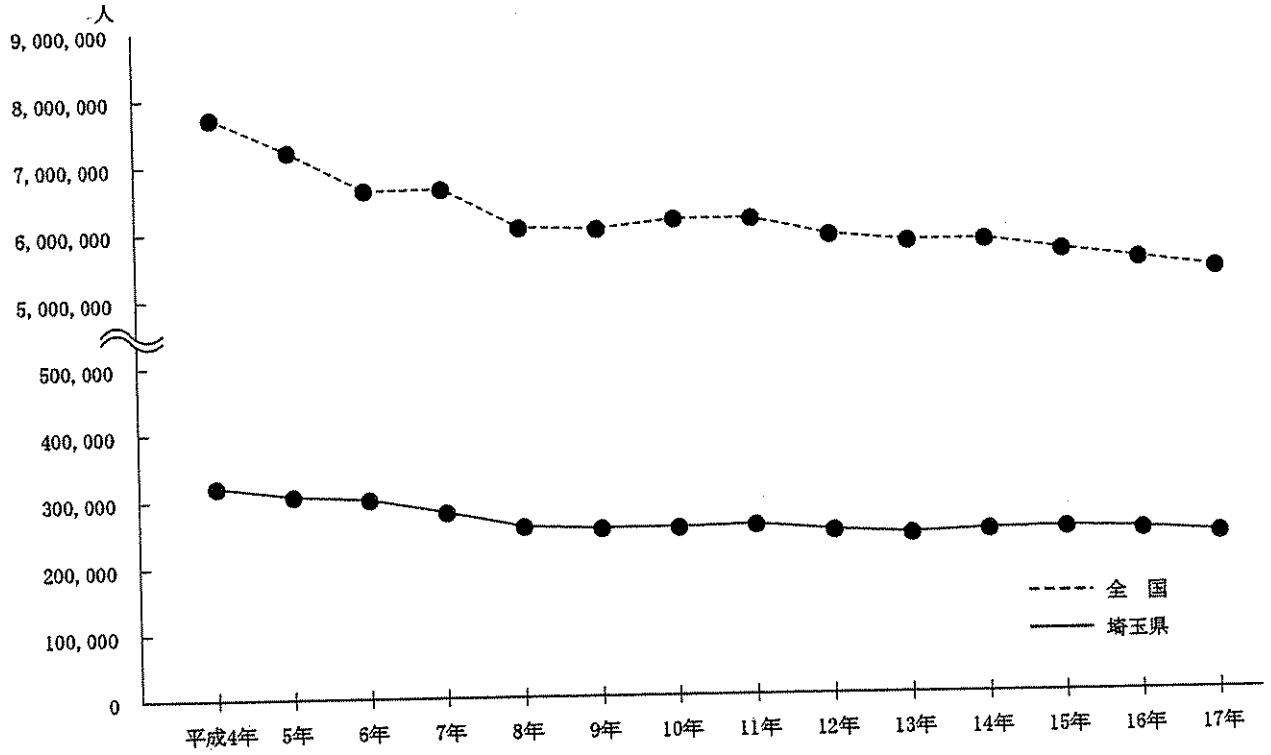
⑤ 採血直後の飲酒は避けること
⑥ 自動車などの運転をする時は十分な休憩をとること

＜なぜ献血が必要なのか。まとめましょう。＞

資料1：年別（県及び全国）献血者数の状況

埼玉県の献血者の総数は減少傾向にありますが、昭和６１年度から導入された４００ｍＬ献血・成分献血を推進したことにより、４００ｍＬ献血・成分献血の献血者数の割合は順調に伸び、献血者全体の８０％前後となっています。

また、全国においても同様の傾向にあります。



① 県及び全国の献血者数の推移

年	埼玉県		全国	
	献血者数（人）	対前年比（%）	献血者数（人）	対前年比（%）
平成 4	319,035	94.4	7,710,693	95.2
5	305,123	95.6	7,205,514	93.4
6	299,295	98.1	6,610,484	91.7
7	279,926	93.5	6,298,706	95.2
8	256,296	91.6	6,039,394	95.9
9	252,330	98.5	5,998,760	99.3
10	252,348	100.0	6,137,378	102.3
11	255,410	101.2	6,139,205	100.0
12	245,303	96.0	5,877,971	95.7
13	240,860	98.2	5,774,269	98.2
14	244,667	98.2	5,784,101	98.2
15	246,326	100.7	5,621,096	97.2
16	243,470	98.8	5,473,140	97.4
17	236,221	97.0	5,320,602	97.2